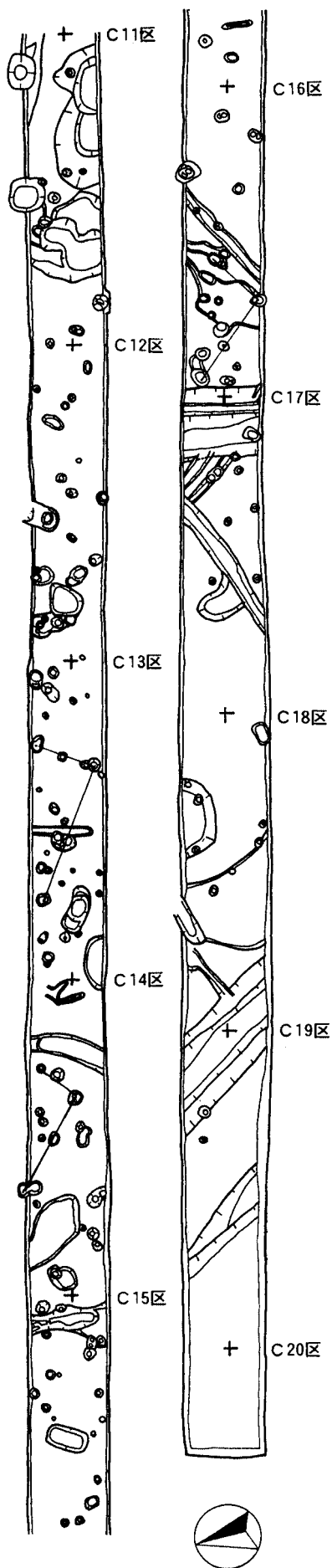




とりべとみられる鉢型土器



割竹型の土製鋳型



箱型の土製鋳型



内面に斜格子目が刻まれた鋳型

そそり
直下遺跡

所在地 加賀市直下町地内

調査期間 平成11年6月16日～平成11年10月17日

調査面積 1600m²

調査担当 松浦郁乃 菅野美香子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

遺跡が所在する直下町は、加賀市の中心部である大聖寺から約3km南東部に位置する。周辺の曾宇町・日谷町とを含めた地域は、三谷地区と呼ばれ、各々の町が3つの谷間に入り込むようにして、集落を営んでいる。調査区は曾宇町の集落が所在する谷から、前面に平野部が広がっていき、その基部に位置する。

調査では、弥生時代・古代・中世の3時期を確認し、中でも8世紀末から9世紀中葉にかけての古代の遺構・遺物がその中心となる。

調査区の中央から北西部にかけて、掘立柱建物群が確認された。現在のところ8棟確認しており、いずれも建物長軸を南北にもつものである。建物1・2を除く建物は3間×3間の側柱建物

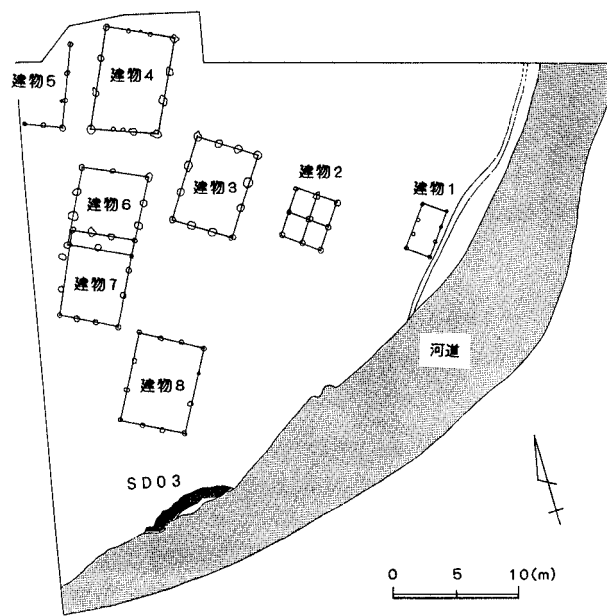
に限られており、それぞれの建物の床面積もほぼ同規模である。屋的な機能を持つ建物と想定される。建物2は2間×2間で、確認された建物群中唯一の総柱建物で、倉と想定され、この遺跡の住人が、多少とも動産所有の可能な階層であることを伺わせる。

調査区の南側から東側にかけては、山際を削るようにして流路をとる河道が確認された。検出面での幅約9m、深さ約1.2mを測り、腐食物と細砂が互層状にみられる上層と、握り拳大の礫が堆積している下層とに大分できる。上層の段階では、川幅を狭めるためと思われる杭列がみられ、中世と思われる杓子や漆器、宋銭などが出土している。SD03はこの河道から一旦建物側に弧状に分岐し、再び河道に合流する。大量の桃核と、建物群と同時期の遺物が多く確認されており、転用硯や「仁」と書かれた墨書土器が出土している。

出土遺物は、近年までの耕作によって出来た攪乱からの出土が大半であった。内容としては須恵器が主体を占め、若干の土師器煮炊具がみられた。注目すべき物としては、土師器製の獣脚の存在があげられる。出土位置はそれぞれ異なるが、三脚とも確認でき、同一個体の物とみられる。いずれも脚部の長さ約10cm・径約5cmで、ヘラ状具により、粗く面取りがされる。おのおの単体で自立する。他遺跡の出土例を実測図で見た限りでは、小松市二ツ梨一貫山窯の土師器焼成坑から出土した獣足と同様の形態をしており、これは三足盤もしくは鉢の一部とみられている。当遺跡出土の脚部も同様の性格のものと考えられる。この脚部が、完形の三足盤もしくは鉢として当遺跡で使用・廃棄された物が、それとも何らかのシンボリックな物として脚部のみが持ち込まただけかについては、今後の検討課題といえよう。

その他の時代としては、弥生時代後期の遺物を含む土坑が1基(SK02)確認された。遺物もSK02からの出土以外は、ほとんど確認できなかった。また、中世についても、河道から遺物の出土があり、それらも生活に密着した物であるため、集落が存在した可能性が考えられる。しかし、今回の調査では建物跡など明確な遺構は確認できなかった。

(松浦)



遺構配置図 (S = 1/600)



獣脚出土状況



航空写真

平成12（2000）年度上半期の遺物整理作業

企画部整理課

1班 金沢市梅田B遺跡（1996・1998年度調査）の出土遺物の整理作業として、土器570点の記名・分類・接合・実測・トレース及び石器5点、木器27点の他に、特記として大型木製品16点の実測・トレースを行った。土器は弥生時代後期前半と、古墳時代前期の甕・壺・高坏・器台などが大半を占め、他に古代の建物跡の地鎮祭祀に使われたと思われる土師器の椀・皿もみられた。石器では砥石、木器では中世の井戸の横棧・側板が主で、実際に板を組み合わせながら実測したのが印象的だった。（海野美香子）

2班 羽咋市四柳ミッコ遺跡（1997年度調査）の分類・接合および、実測・トレースを行った。

縄文時代晩期から中世にわたる土器や木器、石器、金属器の整理作業の中で、一際目を引いたのは、陶邑窯産の高坏である。ミッコ遺跡は幾度かの、洪水による影響を受けていたことが判っていたため、出土資料全般を隈無く点検すると同時に、陶邑に係わる参考資料を集めつつ、学びながら作業を進めていった。整理終了時には、古き物に触れ、新しき事を知る場であることを再認識した。（本保早苗）

3班 4月から5月にかけて、三つの遺跡の整理に携わった。まずは矢崎宮の下遺跡（1998年度調査）にはじまり、橋爪新A遺跡（1999年度調査）、指江B遺跡他（1999年度調査で、領家指江ハシバ遺跡を一部含む）、そして四つ目の甘田タイ遺跡（1999年度調査）で前半は終了した。四つの遺跡の中で最も整理期間の長かった指江B遺跡他では、古墳時代後期、奈良・平安時代、中世の出土遺物が大量にあり、中でも墨書土器の多さには全く驚かされた。（本谷祥恵）

4班 先ず金沢城跡三の丸2次（1999年度調査）で瓦中心の実測・トレース。次に新丸2次（1998年度調査）で陶磁器の椀皿中心の実測・トレース。更に三の丸1次（1998年度調査）で陶磁器、瓦の実測・トレース、鉄砲所の跡ということで、めったにお目にかかれない鉄砲の様々な部品（雨覆、引き金、胴金、目当、火蓋、座金、ゼンマイ等）を実測・トレース。続いて本丸附段（1998年度調査）で灯明皿、火鉢、瓦等を実測・トレース。以上、前期は通して金沢城の整理を行った。（小屋玲子）

5班 鹿島郡田鶴浜町三引遺跡（1998・1999年度調査）縄文早期～前期初頭を中心とした土器、石器の分類・接合に6月から入った。4つの貝塚を含む資料は膨大、長い時を海中で過ごした土器の保存状態は良好で、当時のまま煤が付着しているものが多かった。厚い煤を取り除き文様が現れると縄文人の様々な個性が見えてくる。サルボウ・ハイガイ等の貝殻を用いた波状条痕が多く、主に植物を使用したと思われる刺突・爪型など、原体を探るのも楽しい作業である。（小林直子）

6班 前年度に行われた田鶴浜町三引C・D遺跡（1996～98年度調査）の分類・接合に引き続き、出土品の実測・トレースを行った。上層出土の遺物に関しては、遺存度は低いものの縄文時代後・晩期の土器が大半を占め、古墳～中世遺構面で多量の木製品が出土しており、その他数は少ないが、土偶・弥生土器・墨書土器・金属器・古銭を実測・トレースした。また、下層出土の遺物は、復元土器10点を含め、縄文時代前期初頭の土器を縄文の撚りや文様に苦心しつつ実測した。（新谷由子）

7班 珠洲市南黒丸遺跡（1998年度調査）の実測・トレースの後、小松市ブッシュウジヤマ古墳群（1999年度調査）の記名・分類・接合・実測・トレースを行った。中でも前者は中世の集落遺跡で、珠洲焼が遺物の大半を占め、甕・壺・片口鉢の三点セットを主に、燭台、水瓶、経筒、硯、分銅等も見られ、さらに窯跡の遺物のように歪み、使用痕の残る物が含まれていた事に強い関心を覚えた。又、中世の平瓦・丸瓦、輸入陶磁器等財力を窺える遺物にも触れ、興味深い遺跡だった。（馬場正子）

8班 金沢市戸水B遺跡（1998年度調査）の記名・分類・接合、そして土器を中心として、木器・

石器の実測・トレースを行った。遺物は弥生中期後半にあたる、戸水B式土器が殆どを占め、法仏式、布留甕も若干みられた。木器では、鳥形木製品や刳物容器の底板が紡錘車に転用されているものなどがあり、これらも全て戸水B式期のものであった。今回の整理作業に携わり、台付鉢や畿内系模倣高坏など、初めて目にする土器が幾つかあり、学ぶことが多い遺跡であった。（北 香織）

復元班 南黒丸遺跡、他に十数ほどの遺跡で、それぞれ個性のある土器など、連日にらめっこしている。梅雨が終わる頃、富来町高田遺跡から出土した、初めて見る古墳時代の置かまど（竈）で戸惑い、所長さんに色々と指導を頂き、無事に修復が済んで展示されることになった。残暑の季節が近づくと、金沢城跡から、重圧感が出てきそうな大甕が目の前に現れ、もしかして「・・・・？」と思いつつ、重労働と覚悟を決めて、その後初秋を迎えている。（小間博文）

洗浄班 春のスタート時は班員が5人だったが、夏には10人もの手で仕事をした。梅田B遺跡から始まり、畝田寺中遺跡、荻島遺跡、指江B遺跡、徳丸遺跡、近岡遺跡の6遺跡の洗浄をした。箱数にすると約670箱、強制乾燥室はいつも“満員御礼”状態だった。又、遺物のなかには墨書土器も数多く含まれ、細やかに且つ慎重丁寧な取り扱いに留意してきている。墨書のなかにははっきりと読めるものもあったが、あまりの達筆や細かく割れていて判読できない方が多かった。今でも墨書土器を扱う時は目を凝らして、どんな文字なのかドキドキしながら洗浄している。（末富しげ子）

平成12年度上半期の出土品整理作業

遺跡名	担当者	4月	5月	6月	7月	8月	9月
八幡遺跡	浜崎						
梅田B遺跡	宮川・松浦・柿田						
四柳ミツコ遺跡	土屋						
指江他	大西						
橋爪新A遺跡	大西	-					
矢崎宮の下遺跡	立原						
甘田タイ遺跡	久田						
金沢城跡三1	熊谷						
金沢城跡三2	滝川						
金沢城跡新2	滝川						
金沢城跡本丸附段	滝川						
永町83	湯尻						
永町88	湯尻						
三浦遺跡	三谷						
三引遺跡	金山						
三引遺跡	安中・湊屋						
近岡遺跡	菅野・土屋						
南黒丸他1	松山・林・和田・浜崎						
ブッショウ山古墳群	垣内・菅野						
八日市地方遺跡	浜崎						
戸水B（西部）	久田						



羽咋市四柳白山下遺跡出土の古代銭貨

加藤 克郎

1 はじめに

平成13年(2001)1月13日(土)—15年振りと報道された大雪が降り始めた日—羽咋市大町ゴンジョガリ遺跡の発掘調査事務所において、地元向けの現地説明会が催された。今年度で国道159号線鹿島バイパス改築工事に伴う発掘調査がほぼ終了することから、羽咋市四柳町・大町地内でのこれまでの発掘調査による成果を披露するという主旨であった。筆者は平成10年度 of 四柳白山下遺跡第5次調査の担当であったため、特に関心を持ちその説明会に出向いた。展示してある様々な遺物を観察していると、それらの中に四柳白山下遺跡から出土した「和同開珎」「隆平永寶」があることに気づいた。和同開珎については年報等で既に公表されているが⁽¹⁾、隆平永寶については公表されていなかったもので全く存外であった。そこで本稿では、これまでの発掘調査による様々な成果の内、特に出土した日本の古代銭貨について紹介しようと思う⁽²⁾。なお、鹿島バイパス改築工事に係わる本遺跡の遺物は現在整理中であり、また発掘調査報告書は未刊であるので、拙稿については本報告の段階で内容に変更が生ずる可能性があることをお断りする。

2 四柳白山下遺跡について

四柳白山下遺跡は羽咋市四柳町地内に所在する。県中央部の北寄り、能登半島の基部西側に位置し、北西部の眉丈山地と南東部の石動山系の碁石ヶ峰山地に挟まれた邑知地溝帯の南東寄りに立地する。本遺跡の西方には邑知潟が広がり、昭和27(1952)年着工の国営干拓事業開始前は、当地から1.5km付近にまで迫っていた⁽³⁾。また能登国府(現七尾市)へ向かう古代の北陸道支路も、邑知潟南東側を経由していたと推定され⁽⁴⁾、本遺跡周辺は水陸交通の要衝であったと考えられる。

石動山系の山容は、富山県氷見市側は比較的なだらかな傾斜を持つのに対して、七尾市・鹿島町・羽咋市側は傾斜が急である。山中には多数の断層が見られ、県内有数の地滑り地帯である。本遺跡は、この石動山系の碁石ヶ峰山地を開析して邑知潟へ流れる、複数の小河川が形成した扇状地扇端部上に、北東から南西方向へ展開している。

さて今回紹介する古代銭貨は都合3枚で、平成6(1994)年度の第1次調査において、A・B地区下層遺構(7世紀末～9世紀)から出土した和同開珎銅銭が1枚、平成8(1996)年度の第3次調査において、F地区 面(平安時代中期)から出土した隆平永寶が1枚、そして平成9(1997)年度G地区0・面(平安時代末期～近世)から出土した隆平永寶が1枚である。

3 和同開珎・隆平永寶について

和同開珎という銭貨は平城京へ遷都される2年前、まだ藤原京に都が置かれていた元明天皇の治世に発行された貨幣であり、銀銭と銅銭とがある。『続日本紀』によると、和銅元年(708)正月に武蔵国秩父郡から「和銅」が献上され、2月に催鑄銭司を設置、5月に銀銭が、8月には銅銭が発行されたと記されている。これは7世紀末以来の「銀の流通」を「銅銭の流通」へと変化させるための措置で

銭名	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字面厚	重量
和同開珎(1次調査)	24.8	20.5	8	6.4	1.4	0.7	1.7
隆平永寶(3次調査)	24.9	21	8.1	7.2	1.4	0.6	1.4
隆平永寶(4次調査)	25.3	21	8	6.6	1.4	0.5	2.2

表1 銭貨計測表(単位 ミリメートル, グラム)



古代銭貨出土遺跡位置図（S = 1/200,000）

あり⁽⁵⁾、翌年8月には銀銭の廃止が布告されている。更に和銅3年(710)改めて和同銀銭の使用が禁ぜられ、銭貨は銅銭に一本化された。この和同開珎銅銭は、天平宝字4年(760)、藤原仲麻呂政権下の萬年通寶鑄造開始までの52年間、鑄造されたものと考えられる。

一方、隆平永寶は平安京に遷都されてから最初に発行された銅銭である。桓武天皇の延暦15年(796)11月8日に鑄造に関する詔が發布されている。その中で「頃者、私鑄滋起、奸鑄紛然。施之交関、既為輕賤。宛之貯蓄不堪實用。」と記され、貨幣改鑄の理由として、私鑄銭の増加とそれに伴う貨幣価値の下落(物価騰貴の防止)を挙げている。また、このほかに都城造営経費の支払い手段という目的も持っていたと考えられている⁽⁶⁾。この隆平永寶は、嵯峨天皇弘仁9年(818)の富壽神寶鑄造開始までの22年間、鑄造されたものと推定されている。

4 四柳白山下遺跡出土の古代銭貨

ア A・B地区下層出土の和同開珎

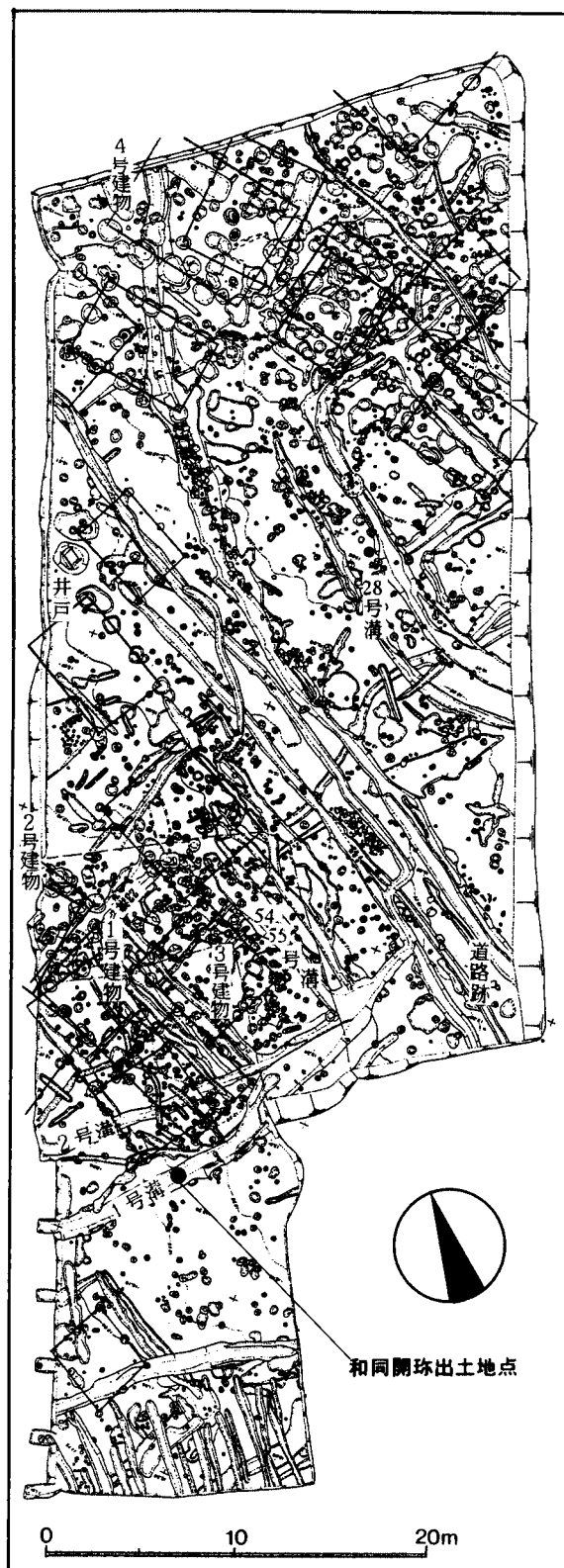
(奈良時代～平安時代前期の集落域)



和銅開珎

まず第1次調査の和同開珎が出土した遺構周辺の概略について記す。A・B地区下層(古代)では集落域が展開することが確認され、南側のE地区は耕作地であることから、当地区は本遺跡の集落域の南限に当たる。南北に通ずる古代の道路跡(集落内の生活道路と推定)があり、その東西には掘立柱建物群を検出している。西側建物群周辺からは漆塗壺や短頸壺、多量の墨書土器が周辺から多く出土している。道路跡より西側を西方に向かって流れる1号溝からは和同開珎銅銭及び帯金具が、4号溝からは木沓が出土している。これらの豊富な出土遺物の他に、付近から「寺」と書かれた墨書土器も出土していることから、調査区に隣接した箇所での寺関連遺構の存在が推測され、また周辺に地域の有力者の居住施設が所在することが想定される。

さて和同開珎が出土した1号溝は幅約40cm・深さ20～30cmの規模で検出されている。この1号溝は南側の耕作地と北側に展開する集落域とを区画する溝であると考えられる。和同開珎は溝底から約15cm上の堆積土層中から出土している。この出土した和同開珎は拓



AB地区下層遺構平面図
(S = 1/400)